

ヒューマンインタラクションとアート・スペースの研究

プロジェクト代表者：伊藤博明（教養学部・教授）

I) ミュージアム研究（伊藤博明）

昨年度に引き続き、野外におけるアート・スペースの調査・研究を、ヨーロッパの2箇所においておこなった。

1) オランダのクレラー・ミュラー美術館。デ・ホーヘ・フェルウェ国立自然公園の中に設置されているこのミュージアムには、ヨーロッパにおいても屈指の屋外の彫刻展示場が隣接している。この展示場の第一の特色は、ロダン、ブールデル、マリーニ、ムーアなどの巨匠の作品が置かれていることよりも、金属やコンクリートなど、硬質な人工物から制作されることの多い現代彫刻が豊かな自然に包含されて、それら自体がまた「自然的」な存在と化していることである〔図1-3〕。また、一巡するだけでも2時間は必要な広大な空間〔図4〕は、さまざまな工夫に満ちており、人間にとって根本的な身体的・感覚的な喜びを発見させる点においても瞠目に値する。



2) イタリアのラツィオ州の「ボマルツォの聖なる森」。この庭園は、16世紀に当地の領主ヴァイチャーノ・オルシーニが領地内に設えたもので、いわば、ヨーロッパにおける野外ミュージアムの先駆的形態と考えることができる。ここには、ギリシア・ローマ神話から導かれた神々や、空想上のものも含む、さまざまな動物の大きな彫像が林立し〔図5〕、また、奇抜な工夫をこらし

た、一種の「驚異」(Merabilia)を創出することが目論まれていた。しかし、この庭園は文化的に孤立した例ではけっしてなく、イタリア・ルネサンスにおける古代趣味と庭園造築の流行との結合のもとに造営され、またそこには、同時代の文学や思想に関する深い造詣を見て取ることが可能なのである。また、今日においても「怪獣庭園」として、辺鄙な地にありながらも訪問者を集めていることは〔図6〕、現代のミュージアム研究にとって示唆的である。なお本研究の成果の一端は、『日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業「日本の文化政策とミュージアムの未来」：「ミュージアムの活用と未来——鑑賞行動の脱領域的研究」グループ 平成19年度報告書』（2008年4月、筑波大学）に掲載した。



II) オルタナティヴ・スペース研究 (外山紀久子)

前年度に引き続き美術館・博物館・劇場といった従来型芸術文化施設以外の種々の場所に展開するオルタナティヴなアート・スペースの事例研究を、内外の現地調査や文献資料の収集を通して継続して行った。

1) 1950年代から現代にいたるまで多様な領域にまたがる実験的な芸術活動を支援してきたニューヨークのジャドソン記念教会 (Judson Memorial Church) 〔図7AB〕を訪問し、現在のプロ



グラム企画担当者にヒアリング調査をするとともに、リンカーン・センター附設のニューヨーク・パブリック・ライブラリー・パフォーミング・アーツ部門において1960年代以降オルタナティブなパフォーマンス・アート・スペースとして用いられた場所の記録映像資料を中心に探索した。また、近年現代美術の新たな拠点として評価を確立しつつあるビーコン市のディア・ビーコン（Dia:Beacon）〔図8〕を訪問し、財団系の研究・展示機関の国際的な大都市近郊における展開の実例を調査した。



2) 日本では山口市の芸術情報センター、秋芳町の秋吉台国際芸術村、山口市常永寺雪舟庭〔図7〕を訪問し、聞き取り調査を含む比較研究を行った。芸術情報センターは、先端的なメディア・アートの展示とアクセスを重視した市立図書館との機能的結合が開館当初から成功を収めているのに対し、秋吉台芸術村では、パフォーミング・アーツを軸としたアーティスト・イン・レジデンス型の現代芸術機関を目指した初期の理念がロケーション・ソフト・運営経費等複合的な問題で頓挫している感が強い。常永寺雪舟庭は観光名所の文化財というのみならずコンセプトチュアル・アートのワークショップが行われた実績を有し、地方都市の歴史的な文化資源活用モデルケースを提供している。

3) 以上の研究成果の一部および途中経過は、埼玉県立近代美術館講堂で開かれたシンポジウム「アート・身体・インタラクション II」（2007/7/21）のパネルセッションで紹介され、さらに「絵画の外部・内部と引き算のミュージアム」『日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業「日本の文化政策とミュージアムの未来」：「ミュージアムの活用と未来—鑑賞行動の脱領域的研究」グループ 平成18年度報告書』（2007、pp. 83-90）、「彼（女）らは何をおそれていたのか？—ポストモダンダンスの逆説」『舞踊學』第30号（2007、pp. 23-30）の形で公刊された。

Ⅲ) シアター研究（市橋秀夫）

本年度は、イギリスにおけるアート・スペースとしてのシアター（劇場）の変容について、とくに20世紀を対象に二次文献の収集と分析を引き続き行なった。また、日本の戦後におけるシアター・スペースの変容について、二次および一次文献の収集を行なった。そのなかでまず明らかになったのは、イギリス、日本ともに、1960年代がアート・スペースとしてのシアターの決定的

な転換の試みがさまざまに行なわれた時代であるという点である。それは、シアター・スペース内部における、観客と舞台・パフォーマンス・演技手との関係やソシアビリティの変化というにとどまらないもので、シアターという既成のスペースそのものの解体が試みられた時代であった。ここでは、日本の事例をとりあげながら、その帰趨と今後の研究課題について述べることにする。

日本におけるそれらの動向は、1969年から刊行された『季刊地下演劇』にもっともよく記録されている。その創刊号において、天井桟敷を主宰していた寺山修司は次のように述べて、既成のシアター・スペースの根底的な解体を説いた。「…出雲の阿国歌舞伎が仮設舞台からしだいに定舞台を必要とするものになっていった慶長年間に、所謂劇場が完成し、劇場的なるものの理が死滅していった。…一口にいえば、建物としての、『劇場』は演劇にとっての牢獄である。ドラマツルギーの転回は、その閉ざされた空間でのみ終始し、思想としての劇場を、ただの『容器』に変えてしまう。大学のコンクリートの建物、社会生活を塀で区切った空間が、その刑務所的な隔離的性格によって、真に『大学的なるもの』を奪ってしまったように、劇場の、ステージ、客席、楽屋、そして伝統的な劇場建築の様式もまた、真に『劇場的なるもの』を奪ってしまった…。」（「劇的想像力または決闘のすすめ」『季刊地下演劇』，no. 1, 1969, p. 9）

いわゆるアート系のスペースに留まらず、街頭や民間の一般住宅というプライベート空間までが、シアター・スペース化されさせたのである。上記の寺山はこう続けている。「劇場がきわめて流動的なものとして日常性を侵し、リビング・ルームや銭湯、はとバスや大衆食堂の中で、思いがけないドラマ（あらかじめ台本を準備された）がはじまるとき、それはステージと観客という階級関係ではなく、一つのスピリチュアル・ラリー（魂の集会）として、新しい関係性を生み出すであろう」（前掲論文、p. 11）と。それは、60年代後半に学生運動がキャンパス・駅頭・街頭であたかも群集劇のように激しく展開されたこととも呼応していたように思われる。

寺山は、不条理劇であろうとブレヒト劇であろうと、ニュー・レフトの「怒れる若者たち」の試みであろうと、劇場の存在意義を問うことのない既存の劇場実践をすべて否定して新しい演劇実践を求めていったのである。劇場を問うていたのは天井桟敷だけではなく、「移動劇場」を掲げた黒色テントや状況劇場はいうまでもなく、多くの小劇場劇団が、公園や体育館などさまざまな劇場以外のスペースの劇場化を試みていた。

しかしこうした試みは、早くも70年代初頭には、内部からも疑問の声があがるようになる。パルコ劇場の開設によって渋谷を演劇の街にするのだという流通資本の側の攻勢を前に、黒テントの津野海太郎はこう書いている。「…街路をも自らのコントロールする施設と化そうという、この思うさま膨れあがったかれらの自信に、たとえば演劇の街頭化といった手段によって、われわれはどれだけ太刀打ちできるだろう。劇場という施設を出れば、そこもまた街路という施設である」（「劇場を盗む」『同時代演劇』，vol. 2, no. 1, 1973, pp. 30-31）。こうした状況を踏まえれば、60年代におけるアート・スペースの変容の検証は、少なくとも、70年代における成り行きの検証、都市のスペース全般のあり方の検証、消費文化全般の検証など、演劇史や劇場史を越える社会的な分析の枠組みが不可欠なのである。